外史はとんでもない人達を呼び寄せました

生まれ変わった人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外史はとんでもない人達を呼び寄せました

【Nコード】

N3915P

【作者名】

生まれ変わった人

【あらすじ】

単なるifの世界を書いてみました。

あまり更新はしませんが、暇つぶし程度にはなる……かもしれませんこれは手抜きです。

銀髪サムライ

とある外史に…

「オレか？…オレの名は…」

一人の男が舞い降りた。

「坂田銀時…万事屋銀ちゃんとはオレのことだ」

「万事屋…ですか？」

侍を名乗るその男は…

「私の真名は華琳。これから私のために尽くしなさい銀時」
「やだ」

銀髪をなびかせ…

「私は雪蓮…これからアナタの血を孫呉に注ぐわ」
「なにそれ？デキチャッタならぬツクラセチャッタ婚？」

外史の秩序を壊していく。

「華琳さまの代わりに男であるあんたが私のケツをぶったたけばいいじゃない！あーもうぶちなさいよ！！！！！！」

変わりゆく恋姫たち

「銀時…貴様は亜莎や明命がよくて…わたしの尻に興味がないとはどういうことだ！！！！」

「思春！！大きい声で言うのを止めなさい！！！！！！」

そして…

「よっ…銀時い…」

渦巻く陰謀

「高杉い…」

「ご主人様…あの人……すごく怖い…」

「やばいわね…あいつ…」

「ええ…とてつもなく危険な存在ね…勘だけど…」

世界の危機

「奴は…高杉は…紅桜でこの国を火の海にするつもりなんだ…」
「な…なんだあの刀は…」
「ば…化物…」

更なる強敵

「あいつ…恋より強い」
「な…なんだと…そんなことが…」
「あ…あいつは…ありえねえ…」
「どうしたの？銀時…奴を知ってるの？」
「ああ…奴の名は」

『夜王』…鳳仙」

状況は最悪

「さ…三国の将全員で行っても…」のザマか…」

「アカン…ホンマにやばいで…」

「もう…ダメなの…」

「く…隊長…」

しかし…

「だからなんだってんだ…」

それでもあきらめない漢^{バカ}がいた。

「テメーらがこの世界でなにしようがどうでもいいし、オレの知ったこつちやねえ…」

「銀時…」

「銀時さま…」

「だがオレのこの剣…こいつが届く範囲がオレの国だ…!!」

存在しない者

一人の青年は見知らぬ荒野の真ん中で目を覚ました。

「…………ソラ…ロクサス…………」

立ち上がろうとするが、力が入らない。

「くそ…………ダスクの野郎…………」

男はなんとか立ち上がろうとするが…………

「へっへ…兄ちゃんよお…死にそうじゃねえか？」

下品そうな声によって行動を中断させられた。

「アニキ！！　なんかこいつ珍しい身なりしてますぜ！！」

「本当なんだな。売ればきつと高そうなんだな」

いきなり黄色い布を頭に巻いたアニキ、チビ、デクが現れた。

その男達に何やら只ならぬ感情が湧きあがる。

「…………さっさとどけ…………」

「どけ？　おい聞いたか？　こいつ恐怖で頭がイカれてるぜ」

リーダー各の暴言に笑いだす三人。

そんな様子を溜息を洩らす。

「一人が三人に敵う訳ねえだろうが」

オマケに粗末な剣を出す始末。

いい加減適当に気絶させて先を急ごうか…と思っていたその時…

「待てえい!!」

「「「?」」」

「……今度は何だよ…」

突如、女の声がし、盗賊は首を傾げ、ボロボロの男は頭を押さえる。

「何だデメエは!!」

「ふ…一般人相手に三人で襲いかかるうとする輩に名乗る名など無い!!」

「んだとう!!」

白い和服みたいな服の女性は紅い槍を構える。

「お兄さん…立てますか?」

「早くこちらに…星殿が時間を稼いでいる内に早く…」

「来たか…風、稟。そちらの御仁を避難させてくれ」

「星ちゃんは?」

「この阿呆達にきついお灸をすえてやる」

その言葉に男達は更に怒る。

「おい…随分と余裕じゃねえか?…お嬢ちゃんよお」

リーダー格の男が怒気をむき出しにするが、女性は態度を変えずに槍を構える。

「……良い度胸じゃねえか……いいぜ……お前は中々上玉だからな……売り飛ばしてやるよ……勿論、俺達が可愛がってからだかな……」
「下衆が……」

「そんなこと言っただけで済むのも今の内だ!!」

そう叫んだ後、チビとデクが女性に剣を使って襲いかかるが、女性はそれでも態度を崩さない。

それどころか……

「遅い!!」

女性は一瞬で男達の間を通り過ぎる。

すると、男達は急に倒れる。

「なっ!!」

「どうした？ 何を驚く？」

男は予想以上の女性の腕に驚きを隠さなかった。

それを女性は皮肉をこめた風に言うと、男に怒りが募った。

「くそっ!!」

「!! しまった!!」

男は剣で絡んでいた男の喉元に突きつける。

女性はすぐにリーダーの男を倒さなかった事に舌打ちをした。

剣と男の喉はほんの僅かな差しかない。

「よし…武器を下ろせ。さもなきやこいつがどうなるか…分かってんな？」

「……………」

カラン

女性が槍を捨てると、男は勝ち誇った表情を浮かべる。

「よし。それじゃあ次は自分で服を脱げ。後ろの二人もな」

「な!?!」

「なんだと!?!」

「…ぐ〜」

「寝るな!?!」

「おおう!?! あまりに残酷な要求を突き付けられ、思わず寝ちゃいました」

眼鏡の女性と金髪の少女の漫才を余所に男は更に怒声を上げる。

「いいから早く脱げってんだよ!! でねえとこいつ殺すぞ!?!」

「……………」

それ以上男を刺激させない様に女性が衣服を手にかけてその時…

「あ〜……………あのさあ……………盛り上がってるところわりいんだけど……………」

男はバツが悪そうに女性に話しかける。

それに対して、女性の動きが止まり、人質の方を見る。

「うるせえ黙ってる!!」

「あのよお……あんたの方が賢そうだから、ちょっと色々と聞かせていい?」

「へ……あの……」

リーダーの怒声に動じることなく陽気に話しかけてくる男に女性……後ろの二人を含めた女性が戸惑う。

「だから……こいつなんとかすつからその後で幾つか尋ねたいんだけどいいかい?」

「は……はあ……」

そんなやり取りでリーダーが脅しに人質に更に剣を突きたてようとした。

その時……

信じられない事が起きた。

男の左右から凄まじい炎が出現。

やがて、その炎は集束され、赤いチャクラムと姿を変えた。

「……」

その場の全員は言葉を失ってしまった。

そんな中、男は…

「火傷しても知らねえぜ!!」

両手のチャクラムに炎を溜め、それをリーダーの左右に投げ込むと、そこから炎が噴出した。

「ぎゃあああああああああああ!!!!」

男は瞬間に炎に包まれ、チャクラムが独りでに持ち主の所に帰ってくる、リーダーは地面でのたうち回る。

「あつつつつうう!! あちいあちいあちいあちい!!」

地面に転がって今だ燃えている火を消そうとする盗賊に女性達は絶句している。

「ん〜……やっぱ疲れてんのか？ 力が入らねえ…」

男は冷静に何かを分析していると…

「うっ……うわあああああああああ!!」

「ば……化物なんだな!!」
「あ?」

女性に気絶させられていたチビとデクはいつのまにか起きており、さっきまでの一部始終を見ていた様だ。

「……逃げろおおおおお!!」

「ま…待つんだな〜!!」

チビとデクはリーダーを運んで猛スピードで逃げていった。

それを見ていた男は盗賊を溜息混じりに見ていると……

「……お主…そのまま動くな」

声の先では先程まで固まっていた女性が捨てていた槍を構えて警戒している。

勿論、後方の少女達も…

そんな中、男は…

「おいおい…あの馬鹿共を追い払ってやったんだ…そりゃねえぜ…」

心底残念そうなりアクションを取る男に今だ警戒する。

しかし、その男は黒いフード付きコートを着ている。

それだけで充分怪しかった。

「なあ…どうしたら信用してくれんだ？」

「……名を名乗ってもらおう…」

すると、男は不敵に笑って答える。

「オレはXIIII機関・NO?のアクセルだ。キオク…したか？」

烈火の如き髪をなびかせた男はこめかみを人差し指で叩いて言い切
った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3915p/>

外史はとんでもない人達を呼び寄せました

2010年12月9日06時34分発行